

## 平成28年度 第1回生涯学習審議会 議事録

### 1 日 時

- 平成28年11月14日（月） 14：45～17：00

### 2 会 場

- 県庁4号館 教育委員会室

### 3 出席者

- 宮崎県生涯学習審議会委員 ※別紙

### 4 開会行事

- 教育次長あいさつ
- 委嘱状交付
- 諮問書手交

### 5 説 明

- 生涯学習審議会について
- 諮問内容について

「持続可能な地域社会を創るみやざきならではの生涯学習の在り方について」

### 6 協 議

**議 長** ただいまの事務局からの説明に対して、質疑等はないか。  
なければ、「新しいゆたかさと生涯学習」という観点で協議したいと思うが、各委員からの意見を伺いたい。

**委 員** 経済的なゆたかさだけでなく、心のゆたかさが大事であるということを説明いただいたが、切実に感じる場面がよくある。例えば、子どもが万引きをした時に、「買い取ります、お金を払えばよいだろう」という保護者の発言がある。経済的なことを念頭においた発言である。「モノを盗る」という心の有り様を飛び抜かして、弁償すれば解決するという貧弱な考えがはびこってしまうと、ゆたかさはどこにいつてしまうのだろうと危惧する。

**委 員** 現在、本市の青年団員数は10数名であり、活動がほとんどない状態である。今の団員に話を聞いてみると、「20数年前のような情熱がある若者はいない。」という残念な回答であった。その原因が、教育なのか、家庭なのかはわからないが、教育の役割は大変大きいと感じている。今は、何かと制約が多いのではないか。それぞれが活動しやすい、仕事をしやすい環境をつくる必要があるのではないか。

**委 員** 「人口減少と地域の魅力の再発見で新しいゆたかさを～」の部分は、現段階で、私の中で十分に結びついていない。私の周りを見ると、職場の中で男性も女性も結婚していない人が多く、子どもを持たない世代が多い。また、結婚すると会社をやめてしまう。

そこが、私たちの考えている「ゆたかさ」と、今の世代が考えている「ゆたかさ」との違い、ゆたかさの世代間ギャップみたいなものではないか。

**委員** 私たちの施設は、子どもたちに学ぶ意欲・態度を醸成していく施設でもある。学ぶことの楽しさをどう気付かせるか、に視点をおいている。なるべく教えない、気付かせるということを中心に様々な活動を行い、子どもたちが将来にわたって学ぶことは楽しいということに気づかせたいと考えている。

先日の研修会で、講師に「諫早市こどもの城」の館長に来ていただいた。講演の中で、スマートフォンの批判をされた。子どもたちを活動させている間、親はスマートフォンに入り込んでいることが問題であるという話であった。確かに分からない事があると、すぐに答えがわかるが、スマートフォンとどう付き合うのかを考える必要がある。何かに興味をもったら深めていくことが大事である。

去年から「やまびこ合宿」という、うちの施設から学校に通わせる事業を始めた。6泊7日の生活の中で、学校で話さない、親にも話さないことを私たちには話してくれる。子どもたちは、最初の3日間は、スマートフォンがないと落ち着かないが、それ以降は、人と人との付き合いが楽しくなったという感想があった。

**委員** 保育園を見ていると、今の子どもたちはチャレンジをしない。親が子どもにチャレンジさせない。保育園で、山登り等の体験活動に対して、危ないからさせないで欲しいというような話がある。チャレンジすることで、初めて分かることもあるのに、なかなか理解してもらえない。また、大人も地域の中でチャレンジが足りない。地域の活動に積極的でない方も多い。チャレンジすることで、新しいゆたかさが育まれているのではないか。

**委員** 楽しい体験をすることが、良質な経験になると考えている。現在は、失敗しないようにという状況が多いが、「失敗を楽しむ」「失敗してもまたチャレンジする」ことが大切なのではないか。「良い」「悪い」「分かる」「できる」しか評価の対象がないと、その評価で自分を評価するので、できない自分がだめになるというジレンマが起こってくる。中学に入ると50%がスマートフォンをもつ時代で、体当たりのコミュニケーションをしなくてもよい世代になっている。しかし、社会に出て何が求められるかという創造性、協調性、即興性を求められる。そこは大変難しいのではないか。

先日、東北大学で学生に対して演劇を通したコミュニケーションワークショップをさせていただいた。参加者はたくさんの気付きがあったように見えたが、振り返りシートには「このワークの意義を知りたい」とあった。今は理屈から入る時代である。先ほどの話にもあったが、スマートフォンで手元に知識がある気がするが、実際には体験としての知識が一番実になるものだと思う。知識として自分に入ったかどうかが不安解消の材料になっているが、新しいゆたかさとは、いかに体験をして、経験を積み重ねていくかではないかと思う。

**委員** 数年前に、串間市のある小学校の運動会に行った。人数が少ないため、地域の運動会と一緒にしていた。地域づくりの視点で見ると、「地域も生き物」であると感じている。地方創生と色々言われているが、どこかで価値観を変えないと発展し続けることはありえない。それが、新しいゆたかさにつながると考えている。

(休息)

**委員** 東京から宮崎に帰って来て見た光景であるが、スーパーでおじいちゃんが孫を連れて買い物をしている。都会では、おばあちゃんとはあっても、おじいちゃんと一緒にというのは見かけない。子育てについても、祖父母だけでなく、近所のおばちゃんたちも協力している。このような宮崎の良さを失ってはいけないと感じた。新しくつくるゆたかさよりも、今まであるゆたかさを失わず、いかに生かしていくかという視点が大事である。

スマートフォンについて、授乳しているお母さん方が、ミルクを飲ませながらスマートフォンを触っている。赤ちゃんと向き合っただけでコミュニケーションをとり、子どもの情を育むとても大事な場面を、単なるエサやり状況になっている。赤ちゃんの時代から心を育むことを大事にしなければならない。

ある歯科医の話だが、老人ホームに出張に行き、歯を少しでも治療して、自ら少しでも何か食べられる幸せを感じてもらおうと亡くなり方が違うそうである。人間としての当たり前前の生活ができるように支援していくことも、ゆたかさにつながっていると感じている。

**委員** 子どもが勝手に親のスマートフォンを使う時代になっている。子守りの道具になっている。何でもお金がかかる時代で、事故を起こしても解決するのは、お金だという感覚。手間ひまをかけずにすぐに答えを求める時代である。子育てが忙しくて、時間がないからできないではなく、だったらどうしたらできるのかを考えようとしなさい。自分が住んでいる地区では、地区の行事に協力して当たり前だが、隣の地区に行くと全く違う。休みの日の行事も参加すると楽しいと気づくのだが。楽しさに気付かせるきっかけ、ヒントを与えたい。すぐ結果を出すことは、大人になって判断すればよいが、子どものころはあれこれ経験させた方がよい。

**委員** 本校は、普通科と違い、専門分野を学んでおり、商業と家庭科について学んでいる。実際の社会に生かしていく実践的な体験を重んじている。学校から地域に飛び出して、学んだ事を生かせる場として、地域のイベント・お祭りに参加したり、地域の企業とタイアップして、地域の特産品で商品開発をし販売している。自分たちが学んだ事が生かして、地域のために少しでも役立ったという達成感や、地域の人たちと触れ合う中での学びによって、地域の良さが子どもたちの心の中に醸成されている。このようなことが、もっと学びたいという意欲や心のゆたかさにつながっていくと考えている。

**委員** 経済的なゆたかさだけではなく、その人の持っている魅力が発揮できることがゆたかさであると思うが、実際には、経済的に苦しい子どもたちもいる。そのような子どもたちがいても、地域の方が気付かない、知っていても声をかけることができない。学校としては、関係機関と連携してアプローチを行っている。

地域が元気になることが、ゆたかさにつながると考えている。

学校は、高齢者世代と子どもの結びつきはよく計画するが、保護者とのつながりはあまりない。新しいゆたかさを実現していく際に、学校がそのつなぎ役になればと考えている。

**委 員** 私は県総合計画審議委員にもなっており、総合計画の展開プログラムの構成・内容について審議してきた。委員には、財界のトップの方々もいるが、最も話が盛り上がるのが、「人財育成」の部分である。今の子どもたちをどう育て行くのかということに興味・関心が高いということは、親としては重責を感じる。このプログラムには、「学力向上」「体力向上」「読書」の3つの重点項目がある。私としては、「ふるさと学習」「郷土愛」が叫ばれている中で、そのような項目が重点項目にないのは、物足りないという意見を言わせていただいた。

人財育成とは、子どもだけではなく、高齢者世代がどう社会と関わりをもっていただけかと思う。学校に地域の高齢者の方々を呼んで、色々なことを子どもたちに話してくださる機会もあるが、それも含めた人財育成であってほしい。

新しいゆたかさであるが、新しいことではなくても今まであるものを上手に未来につなげていくことができないのかという意見も出ていたので報告する。

また、総合政策課が作成したプログラムの内容の資料もつけていただくと、広い視野で審議できるのではないか。

**委 員** 親たちの教育がどこから狂ったのかはわからないが、以前は地域で見守ることができていたのが、今は個人主義に陥っている。自分たちさえよければ、という風潮である。経済的にゆたかになると、家で食事を作るのではなく、外食で済ますという生活になってしまい、人の話を聞かない、注意を受けられない、上司に言われてうつになってしまうという悪循環を生んでいる。

地域の祭りにきた子どもたちと話すと、一人一人はよい子が多いのだが、認めてやれる場がなく、経済的にゆたかになることだけに走っている。もっと体験を通してのゆたかさを教えてやらなければならない。今は忙しくて子どもを放置する親も多くなった。ガールスカウトの行事にも、親は子どもを連れてきて、連れて帰るだけで、一緒に参加しない。子どもの教育もだが、親も共に学ぶということをしていかなければならない。

**委 員** 私は児童養護施設や児童相談所と関わらせていただいている。そこで子どもたちや職員の方々と話す機会があるが、安心の先にしか学びはないと思う。衣食住が足りて初めて安心が生まれ、チャレンジする心が生まれるのではないか。

私たちは、「できているところ」に注目するということを伝えているが、これは宮崎に対しても同じで、宮崎のできていないところではなく、宮崎の強みに焦点を当てて、大人である私たちが元気になることが必要である。つまり価値観の発想の転換である。価値観を変えることは時間がかかることではあるが、見る視点が変わってくる。

また、「手間ひまかける」という話があったが、「できているところ」にエネルギーをかけて、ほめることが必要である。虐待している家庭は、安心がないからである。大人が宮崎は大丈夫だと子どもたちに伝える事が大事である。

**委 員** 私が新しいゆたかさと聞いて考えたのは包容力である。

今の子育て世代を見ていて感じるのが、子どもたちの好きな事をさせているが、それは自分第一主義であって、自分のやりたくないこと、関わりたくないことはやらないということである。

私は子どもの声が聞こえるとほっとするのだが、今は子どもを排除する風潮があるの

ではないか。一昔前だと、近所の人たちの温かさがあつたが、今はなくなっている。

地域の人々との交流の場をつくって、垣根を取り払う経験を積み重ねていくことで、地域が元気になって、地域がつながっていくのではないかと思う。世代を越えた交流の場を仕組んでいくことが必要である。

今は大人も子どもも待てない。共働きの核家族の世帯では、家庭の中で言葉のやり取りを積み重ねて、コミュニケーション能力を育むのは難しい。地域に連れ出して、他の大人との交流の場をつくる必要がある。

**議 長** 各委員のそれぞれの立場から御意見をいただいたが、他にないか。

**委 員** 今の時代、子どもも親もじいちゃん、ばあちゃんも忙しいのではないか。65歳まで働きながら孫はみれない。孫をみるための休暇はない。子どもを産み育てられる環境が必要。また、体験させてあげたいが、子ども会などの行事も忙しくて参加できない。

私のマンションも子どもの声が聞こえなくなった。先日あった清掃活動には、167世帯中20名ほどの参加だった。子どもたちは忙しくて全くでてこない。体験させたいが時間がなく忙しい。その中で新しいゆたかさをこれから考えていけたらよい。

**委 員** 最近、想像力が乏しいのではないかと考えている。今までの話にあつたが、それぞれが忙しくて、関わりが薄くなり、相手の事を想像することができない。想像力をゆたかにする手立てはできないのか、考えている。

例えば、高齢者の方々に対しては、下の世話だったり、食事の介護のことだけが前面にでていて、社会の見方が、高齢者は弱者であると排除するような風潮で、子どもたちもそのまま刷り込まれている。そうではなくて、高齢者は、どう生きてきたのか、どう生きたいのかということ伝えることが必要である。

その関わり方のしくみが何かプログラムの中に入っていないかと感じている。

**委 員** コミュニケーションができると、人とのつながりができると感じている。

よく家の庭で作業しているときに、面識のない近所の方と挨拶を交わしたのをきっかけに知り合いになり、ネットワークができる。ちょっとしたことで心配してくれたこともあつた。他県では考えられない人なつっこい宮崎の県民性もカギになるのではないか。

**議 長** 活発な御意見をいただき、具体的な案もでてきて豊かな議論ができた。時間となったので、事務局にお返りする。

## 7 閉会行事

- 生涯学習課長あいさつ
- 諸連絡

宮崎に必要な「新しいゆたかさ」について、様々な意見が出された。今後はこの意見をもとに柱立てをし、平成30年度の答申を目標に、審議を重ねていく。